

市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会

会長 太橋秀一郎

No. 9 平成4年11月1日発行 編集：総務委員 矢倉 睦

▶▶▶▶ 『夏休み』 山行 特集号 ◀◀◀◀

28年振りの剣

藤村 達夫

同行者： 佐々木惣四郎、林氏（佐々木氏会社関係）、西村正男

日 程：

7月23日（木）奈良 6:00 北陸道立山インター 10:10 立山駅 11:20～11:30

室堂 12:40～13:10 雷鳥平TS 13:30

7月24日（金）TS 6:00 剣御前 7:10 大汝山 9:30 雄山 10:30

一ノ越 11:05 TS 12:20

7月25日（土）TS 6:15 室堂乗越 6:50 奥大日岳 8:40～10:00 TS 11:30

7月26日（日）下山

昨年、岡本先輩のお誘いを受け、市大山岳部員なら誰しも憧憬の的であったランタンリルの雄姿をこの目で見る事が出来、四半世紀以上も眠っていた、山登りの虫がまたぞろ活動を始めた。紺碧の空に突きささるリルの先鋒、満天の星空、月明かりの下、神々しいまでに荘厳な真夜中のリルの姿は今も強く心に焼きつけられている。

知る人ぞ知る世界の漫遊人、佐々木先輩が梅雨明け狙って立山に出掛けると聞いて、同行を申し出た。長期休暇中の西村に声を掛けたら、勿論、即OK。久しぶりにテントを持って雷鳥沢に入る。

7月24日 関西で梅雨明け宣言が済み、絶好の夏晴れを期待して入山するも、夜来の雨。それなりに無理して取った休日を無為に過ごす訳にはいかぬと思いきや

雨は幸いにも止んだ。ガスの中、兎に角、劔御前を目指す。体調もまあまあ、逸る心をおさえきれず1時間余り、2ピッチで別山乗越（劔御前）迄登りきった。上空は晴れているが、丁度乗越位の高度はガスの中、富山側からの風は強く寒い。

“見えた”思わず叫んだ。別山の手前の肩の辺り、突然、しかしほんの数秒、劔の岩峰が朝日に輝いて、雲のヴェールに見え隠れする。それは28年振りのまぎれもなく劔だった。乳白色のキャンバスに黒々とした岩峰は輝いていた。

28年前の12月、あの頂上の小さなテントに兎山先輩と2人で、小窓尾根を縦走して来る岡野・龍田先輩を、ただひたすら待ち、さびしい心細い夜を過ごした。早月尾根の厳しいつらいラッセル、頂上直下のルート工作、あの陰湿な池の谷の様相が臉に浮かび上がって来るのだった。

気温の上昇と共にガスも切れ、立山連峰の稜線散歩を楽しみ、雷鳥沢のテントへ帰る。北アルプスの山々が存分に遠望できた。この日富山県、梅雨明け宣言。

7月25日 早朝より申し分のない夏空（一点雲も無し）。室堂乗越より奥大日岳へ。雪渓、お花畑を楽しみながら快適な尾根歩き。早月尾根越しの劔岳西面、遠く白馬岳、五龍、又、槍・穂高連峰、白山。真夏の太陽に照らし出された日本アルプスの山々。咲き出した高山植物が美しい。コバイケソウ、ミヤマダイコンソウ、イワカガミ、チングルマ、ミヤマキンバイ、ショウジョウバカマ、ハクサンイチゲ、ハクサンチドリ。お花畑でしばしまどろみ、昼過ぎ帰幕。この日も雷鳥沢ヒュッテで温泉浴。

最高の夏山登山となった。さて、紅葉のシーズンは何処へ行こうか…

頂上を目指ける闘争、ただそれだけで人間の心をみたすのに十分たりるのだ。いまやシージュポスは幸福なのだと思うねばならぬ。

シージュポスの神話よりー

天狗原より槍ヶ岳～新穂高温泉散策

佐々木惣四郎

メンバー： 佐々木惣四郎、藤村達夫

期 間： 9月19日～20日

9月18日（金）の朝、衝動的に出発を決め、その日の仕事をバッチリこなし、阪神ホテル前から21：30の北ア行バスに乗り込む。

表銀座から入山の予定であったが、夜より雨が降り出し、途中下車して上高地に向かうこととなった。

9月19日（土） 松本(4:00)－鳥ヶー上高地(9:00)－横尾(11:00)－
槍ロッジ(13:00)

幸い出発間近に雨が止み、共に久し振りに、銀座街道をたどった。残念乍ら稜線はガスで見えず、辛ろうじて焼岳を望めたのが慰めであった。

大正池は土砂流によりやせ細り、往年の面影は薄い。しかし、横尾への藤村の足は、現役以上の快調さで、アットという間に徳沢（徳沢園は旧館が改築中）～横尾をすぎ、本日のお宿槍ロッジに着いた。

ロッジは、素泊まりで4,500円/人であり、サービス券持参で4,000円/人になり、食事をつくっている間に、ネパールで昨年5月世話になったザンブー氏が下山してきて会談。早速、円熟老年隊の岡本夫妻（19日昼入山）が泊まっている明神に連絡し、はげます。

9月20日（日） 起床(3:30)－出発(4:30)－天狗原との分岐点(7:00)－
槍稜線(11:00)－槍ヒュッテ(11:30)－新穂高へ出発(12:30)
－新穂高温泉(18:30)

暗い中から待ちきれずに起き、生ラーメンを作る。ブラブラとライトをつけて歩きだし、2.5Hにて天狗原と直線ルートとの分岐点に到達。どちらもルートマップなく、何となく天狗原ルートを取り、日本晴れの久し振りの槍の姿を存分に楽しむ。

天狗原までは道もよかったが、これからは長いルートとは思っていたが、4Hかかって槍山荘へ。山荘では佐々木がコーヒーを作って、ベースキャンプに落ち着き、若い藤村がアタック隊として登頂。

槍より新穂高への道は長く陰しく、かつ高度差2,000mあり、6Hひたすら下りに下り、暗くなってからフラフラで新穂高に到着。思えば、今日一日のルートは、青年隊にとって極めてチャレンジ的な要素に溢れたものであった。

笠山荘に投宿したが温泉もよく、10,000円/人で極めて満足であった。

なお、円熟老年隊の岡本夫妻は、19日入山の後、4泊にて槍を極め（？）24日下山されたとの事であった。

（'92年10月吉日）

ひとりで祖母山を楽しむ

高木健次

7月9日夜、神戸港中突堤から乗船。船中で聴取した天気予報と、10日朝別府入港時の快晴と、によって本日決行を決意した。JR別府から大分で乗り換えて、豊肥本線「緒方」に10時36分着。駅前からタクシーをとばして40分で尾平の紅葉旅館（予約済み）に到着。

これだけの天気なら予定を変えてこれから登る、と言ったら夫妻がそれもよからうと、昼食のオニギリを急いで作ってくれた。あれが祖母山頂（1,757m）だと主人に教えてもらって、11時半出発。念のためライトも旅館から借りた。

鉱業所跡の廃水溝を幾つか渡って奥岳川の吊り橋を渡る。その直前に1人の登山者とスレ違った。頂上を9時半に出発して下山したと言っていた。杉木立の入口に“熊に注意”の立札があった。念のため、リュックと腹のバンドに鈴をつけて野獣対策にする。

突然、林道に出てそれを左に歩く。国土地理院の5万分の1では、もっと下（川に沿って）に道が書かれている。林道がつきる処で、くされかかった橋を渡って、右側に登山道が続く。いよいよ本格的な尾根道だ。伐採跡の植林がつきて、原生林に入る。これまでに数回休んで、夫々オニギリ1ヶづつ「分散した昼食」をとった。

かなりの急坂を登る。日頃愛宕山に登っていたので息は多少のユトリあり。登山道入口から1時間半で官原に到着。ここは障子岩尾根の縦走コースとの合流点で標識あり。やっと尾根についたので多少の展望が開けてきた。ここから縦走路を左にとり、尾根道の上りと小さな下りが入り混じる。これまでの上りは何か荒島岳（福井県勝原から）の登路に似ていると思った。かなり疲れて来たのでユックリのペースに落としたが、山頂を望みつつ何とかこなし得る登路であるとは感じていた。途中、馬の背の見晴らしは見事で、切り立つガケであった。9合目小屋の戸は開いていたが人は見えなかった。10分で山頂（神武天皇の祖母豊玉姫命を祭っている）に到着。たった1人で快晴の展望を楽しんだ。（15時25分～45分）大分・宮崎の県境だ。

南下して天狗廻りと思ったが、夕方も近づいて来たので、芸がない話だが同じ道を下山に決心。下りも写真を撮る時間は充分とりながら、ひとり歩きを楽しむ。実は、尾平につく迄にタクシーの運転手から「今年2月に、陸運局の45才の課長が傾山に入り、出てこない。更に、今年5月に姫路から70才の方が傾山に入山

し、これも未帰還…」と教わっていた。傾山(1,602m)よりも、奥深い山に登るので若干心理的に影響を受けたのも事実。捻挫に気をつけて下り、吊橋に出た時はヤレヤレと思った。人間にも野獣にも会わなかった今回の登山。気が緩んでブラブラ歩いて18時25分に紅葉旅館に着いた。

使わなかったライトを主人に返却し、概要を話す。「バランスのとれた登山だ。年齢からしたら遅いことはない」と主人。大分県の一村一品運動の成果として、「当地では椎茸」とのことで、オミヤゲに購入。

これで、深田久弥の百名山に関して、近畿地方以西は屋久島の宮之浦岳を除いて、無事終了したこととなった。

明11日(土)は中小企業診断士の仲間と夕方に別府で合流するので、AMに鶴見岳(1,374m)に登るつもりで、ゆっくり就寝した。

飯豊連峰縦走

岡野幸義

1992年8月19日－8月22日

皆さん、ご無沙汰いたしております。卒業してから早28年経ちますが、最近はまだまった休暇がとれないこともあって、大した山には登っておりません。15年位前に実家の納屋が焼けてピッケル、アイゼンを消失してからは雪山に登っておりません。

4年前の7月に出張のついでにシャモニーに行く機会がありましたが、この時ロープウェイの頂上駅からモンブランを眺めて無性に登りたくなったのを思い出します。登るためにはピッケル、アイゼンを買って鍛え直す必要がありますが。

台湾の新高山やできればキリマンジャロにも元気なうちに登ってみたいと考えております。グランドキャニオンの河底へも下りてみたい。ボルネオに4000メートル峰があると聞きますが、何方か一緒に行きませんか…という風に夢は大きく膨らませていますが、現実はいキング程度の山行しかやっておりません。

思い立ったらすぐ出かけることと、パートナーを探すのが面倒なのでいつも一人です。荷物をできるだけ軽くして、できるだけ早く忙しく登る登り方が性分に合っているようです。たとえば北アの表銀座コースであれば早朝に中房温泉を発って、翌日槍ヶ岳に登ってその日のうちに大阪に帰っているというような感じです。

北アルプスはおもしろいのですが、夏は人が多すぎるのでよくありません。

今夏は飯豊連峰に行きました。昔、朝日連峰に登って、暇ができたならその側の飯豊にも一度登ってもよいなというぐらゐの理由からです。

大阪を朝出発し、東海、東北と新幹線を乗り継いで郡山へ行き、磐越西線に乗り換えて山都駅に夕方4時頃に着く。駅前でバスが待っているが登山口は終点からさらに10km奥とのことでタクシーで行くことにする。

飯豊鉱泉の宿泊客は5名。登山者は少ない。翌朝5時に出発。最初の3時間ほどは樹林の中の登りである。稜線に出ると、いつも気分が清々する。青々としてゆったりとした山容が続く。三国小屋、切合小屋、飯豊本山を通過して御西小屋まで行く。かれこれ9時間かかる。夕方から雨が降り出す。

翌朝、ドシャ降りであるが出発する。道をまちがえて2時間ほどロスする。景色は見えないが楽しい。梅皮木小屋、北股岳、門内岳など登り下りをくりかえした後、梶川尾根を下る。急な悪道の下りであった。

下山地の天狗平では一般観光客が多く、泊まる場所がない上、バスは翌朝までないので困っていたところ、仙台から来た親子3人連れの登山者の方がマイカーに便乗させてくれるとのこと。遠慮なく乗せていただく。とうとう3時間ほどかかって蔵王温泉まで送っていただいた上、安くて居心地のよい旅館まで世話していただく。

久しぶりの親切に感動。その夜はビールで乾杯、熟睡する。

<コースタイム>

8月20日 飯豊鉱泉 5:00-切合小屋 10:00-飯豊本山 13:00-御西小屋 14:00

8月21日 出発 7:00-梅皮木小屋 11:00-門内岳 12:00-梶川尾根-
飯豊山荘 16:00

川内・下田(しただ)杉川〜光来出沢

田中博之

▽期 日 9月12日〜9月15日

▽メンバー 田中・青島
高雄・山森(京大山岳部OB)
加藤(山形大ワンゲルOB)

大学卒業後も結婚後も子供ができてからも山を続けております。内容的にも現役のころと遜色はないと思うところへ行き続けています。しかし、確実においぼれて来ています。最近では体力と気力の衰えを自覚し、情熱が萎えて来ていることにおののき、職場ではゴルフを願みずに、きつく、きたなく、危険な山にうつつを抜かすへんなやつと見られ、加えて妻子の強力な反対、とりわけ子供の「パパ、お山行っちゃダメ！」に激しくくじけ、もはや、周囲の環境は山を続けるのになにひとつ有利なものはない状況です。それでも行きたいところは一杯あるじゃないかと自らを鼓舞し、マイホームパパになることを墮落と信じて、執拗に山にこだわり続けているのです。幸いにも志を同じくする三人の仲間がなお健在で、衰えの著しいぼくを叱咤激励して山に連れていってくれるので、今年も1～3月は冬眠していましたが、4月には突然目覚めて妙高と白山に山スキー、5月は立山・劔岳で山スキー、6月から沢に転じて奥美濃金ヶ丸沢、7月中ア中田切川、8月苗場山釜川、9月が標題の杉川とかるうじて月いちの面目を保っております。ところで三人の同士とは誰であるかということをもまず紹介しておきます。ひとりとは市大山岳会の後輩青島です。ひとは高校山岳部の後輩で、京大山岳部OB、結婚しても頑固に山スキーと沢にこだわっている男、高尾。もうひとは高尾の大学山岳部の後輩で、やはり山スキーと沢にこだわっている心やさしき男、山森君。杉川もこの三人とぼくを含めて計画したのですが、もうひとり、高尾と同期の高校山岳部の後輩がはいっていた山形大のワンゲルの先輩、マラソンにも出るという元気印で、しかも料理人の加藤さんも参加して五人で行って来ました。

ところで川内・下田とはどこかといいますと、これは新潟県のやぶ深き低山であります。新潟県には高い山はないのですが、今年は大坂からわざわざ新潟まで三度も通ってしまいました。海谷、頸城、上信越国境稜線、奥只見、飯豊、朝日といった新潟の山はせいぜい二千m前後ですが、日本アルプスを凌ぐ魅力があるようです。きらびやかな脚光を浴びる一流の山はないかもしれませんが、そこに秘められた溪谷のすばらしさは黒部川や赤石沢以上のものがあるように思えます。低いくせになお魅力ある新潟の山の中でもとりわけ低山、たかだか1300mで、なにが悲しくて大坂くんだりから出掛けていかねばならないのかと自戒の念にかられるような山、それが川内・下田の山です。川内山塊は新潟平野のど真ん中を少し山にはいると直ちに広がる、ただの里山、裏山にすぎません。しかし、この低い山が雪に磨かれたすさまじいスラブで護衛され、道はほとんどありません。加えてブヨ、ヒル、ダニ、カ、マムシといったとんでもない小動物に守られて、およそ人が近付かないところとなっているのです。沢やなら誰もが知っている早出川はここを貫く大溪谷であり、我々がめざした杉川はその一大支流です。

ゴルジュに淵が続いて人を寄せつけない溪谷。しかし、さればこそ川内の溪谷は我々を誘うのです。

9/12 「きたぐに」で加茂から入山。タクシーで林道終点まではいい、ただちに杉川本流に降りて遡行開始。取水口を越えると水量は増え、ゴルジュの中を一杯に流れて、ほとんど水中に身を沈めるか、へつりかの遡行となる。しかし泳ぎは予想より少なかった。毛石沢出合の先まで。

9/13 昨日と同じくゴルジュの遡行が続く。支流の八匹沢はすさまじいスラブの谷だ。八匹沢を過ぎてしばらく行くとやっとゴルジュが終わる。長い河原歩きの末にアカシガラ沢の出合で泊まる。この日は釣りに興じて少しさぼりすぎた。

9/14 カンバナ沢出合までは美しい溪相だが問題はない。青里沢にはいると滝が続く。なかなか渡り登りを強要される滝もあるが、大滝がないので気楽に越える。やがてつめになるが、傾斜はあってもやぶこぎがたいしたことなくて助かる。稜線に道はない。うれしくはないが、正しい山である。すこし稜線のやぶこぎをして、光来出沢の支流、崩岳沢を降りる。スラブが立ち、連瀑をかけるけっこう悪沢だ。予定では粟ヶ岳に登り返そうということであったが、光来出沢に出るともう時間切れだ。

9/14 光来出沢はなかなか美しい。でも天気が悪い。東又沢を過ぎてしばらくで右岸の道に上る。笠掘湖畔まで行き、ダム湖は観光船に便乗した。

☆ "III" "OCB" "PP" "III" "OCB" "PP" "III" "OCB" "PP" "III" "OCB" "PP" ☆

月見山行（高津小屋）報告

中村光伸

平成4年9月12日（土）～13日（日）

<12日 晴>

昼食を比良の川勝山荘でいただくことになって、正午に集合。故泉隆次郎氏夫人、藤本勇・光子夫妻、石田（光子さんの友人）、清原、上堂、長谷川、鳥川、中村光伸・幸子（中村次女）、川勝弘一・幸子夫妻の合計12名。ご馳走をいただき乍ら歓談。沢山ビール、ワインを飲んで、2時半ごろようやく重い腰を上げて、

中村幸子以外は高津小屋へ出発。

泉氏夫人はリフト、ロープウェイにのって、比良ロッヂまで歩かれました。晴天にめぐまれ、琵琶湖から鈴鹿までよく見える。川勝幸子さんは泉氏夫人と引きかえす。島川氏は高津小屋まで重いビールをボッカして下さって、翌日に用事があるため下山。この時点で高津小屋には8名。

そこへ岡本、苑樹が到着。更に名古屋の久保田氏の友人である岩槻、北村のお二人が、蓬萊山から縦走して到着されました。しかし高津小屋に直行されるはずの久保田氏本人が現れないので、岡本氏が迎えにゆく。食事を始め宴たけなわの8時ごろ、ようやく久保田淳三・和子夫妻と友人の皆川さんが到着。ロープウェイの時間に間にあわず、釈迦駅から歩いてカラ岳をまわってこられた由。これで予定の15名が勢ぞろい。十六夜の月をながめて心ゆくまで飲む。

藤本さんがワープロで打って下さった歌集を見ながら、昔の歌をうたったり、岩魚を二匹すくってきて骨酒をつくって飲む。2時すぎ就寝。

<13日 曇り一時雨ときどき晴>

7時すぎ起床。朝食後清原氏下山。岡本、上堂、長谷川、苑樹、川勝、中村、久保田、岩槻、北村、石田の10名は武奈ヶ岳へ出発。藤本夫妻と皆川、久保田氏夫人の4名は小屋にのこる。高津小屋出発9時。イブルキのコバを通過して10時武奈ヶ岳。北稜細川越スゲ原を経て小屋着11時15分。

山辻氏が待っていてくれた。川勝氏下山。土屋久美子さん真理子嬢到着。昼食後2時ごろ全員下山。久保田氏一行と苑樹氏はカラ岳をまわる。他はロープウェイの山上駅へ。

恒例の比良月見山行は、今年はきれいなお月さまが見られました。めづらしいメンバーもご参加下さり、盛会の裡に終わりました。ご協力下さった方々にお礼申し上げます。有難うございました。

第12回ゴルフコンペの報告

諏訪真一

日 時： 平成4年8月11日（火）

場 所： 神戸ゴルフ倶楽部

メンバー： 大橋秀一郎、川勝弘一、藤本 勇、小笹 孝、久保田淳三、
岡本恒夫、苑樹 寛、藤本富久、諏訪真一、広瀬秀夫、

宮川憲明（藤村氏友人） 計11名

恒例の大阪市立大学山岳会ゴルフコンペも第12回を数え、大橋会長のお世話で今年も六甲山で行うことができました。毎年お盆の頃に、平地の暑さを忘れて山岳会らしく、六甲山にある日本最初のゴルフ場として有名な神戸ゴルフ倶楽部で、ゴルフを通じて親睦を深めております。

コースは1903年に英国人茶商A. H. グループによって造られた由緒あるゴルフ場で、谷越え、山越えや打ち上げ、打ち下ろしのホールも多く、いつも参加者はそのアップダウンを楽しんでいます。

成績は 優勝 久保田淳三

2位 藤本 勇

3位 藤木 富久

ベストグロス 宮川 憲明

の諸氏でした。

始めから都合のつかなかった人や参加予定ながら急用のため参加できなかった藤村達夫氏、あいにく膝の調子が悪く主治医の譚訪ドクターの同行にもかかわらず途中でリタイアされた大橋会長など残念組も、ぜひ次回は調整の上ご参加下さい。

ゴルフを楽しんだ人、山登りを楽しんだ人、会員とのひとときを楽しんだ人などそれぞれに楽しい一日でした。

シェルパとの再会

藤本 勇

女房が故松村健一ご夫妻に、初めてネパールに連れてもらってから10数年になる。その後、彼女は友達を見つけてはランタン、ジョムソン、アンナプルナー周などと毎年のようにネパールに出掛けるようになった。小生もこれに負けてなるものかと、ここ数年ネパールへ何度か出掛けるようになった。

今、カトマンズの青年の多くは短期間で多額の収入が得られるので日本に行きたがっている。モンスーンの間はシェルパもネパールにいても観光客も少なく、仕事がないので出稼ぎたいと思っている。

何度も私たち夫婦をガイドしてくれたザンブー・シェルパ（32才）が、今夏3ヶ月のビザを取得して檜沢ロッジに日本語研修という名目で来日した。昨年5月、リルン遭難30年目の墓参に森本夫人、大島氏実弟、三島先輩らとランタンへ行っ

たとき、サードーとして皆の世話をしてくれたのが彼であった。

知人が毎日テレビの幹部にシェルパ来日の話をすると、是非テレビ取材させてほしいとのこと。夏のニュースとしては面白いテーマとか。

毎日テレビの記者、カメラマン、助手2名と私達夫婦の合計6名が上高地から槍沢に向かう。まず、槍沢ロッジに滞在しているザンブー君との出会いからテレビカメラが動く。夕食後、全員アルコールが入った頃をみつけて、記者は盛んに女房にネパールダンスを踊ってくれと懇願している。一種のヤラセかなあ？ 女房は最初は辞退していたが、彼の熱心さに負けて踊り出す。カメラは執拗に彼女とザンブー君の踊りを撮っている。

翌日は快晴の中、テレビ屋さんたちと一緒に槍ヶ岳へ向かう。昔、槍沢を下ったのはあるが、登るのは初めてである。途中、天狗原に立ち寄る。天狗池に映る槍の穂先が素晴らしい。また、天狗原の手前で、今を盛りと高山植物が咲き乱れ、疲れを癒してくれた。

ザンブー君は毎日テレビの人達の個人装備を背負い、私達は個人装備だけで登るも槍沢の登りは単調で長い。三人で槍を登っていて、途中何度も休憩して、英語・ネパール語・日本語で話し合っていると、まるでネパールの一角をトレッキングしているようだった。まさか、ザンブー君と一緒に日本の山、それも北アルプスに登れるとは夢のようだ。

夕方4時頃、槍の肩に到着。残念ながらガスが出ていたので、槍への登頂は明日に延ばして肩の小屋に入る、しかし、夜中から雨が降り出し、期待していたご来光も見られず、穂先への登りも断念して槍沢を下る。

雨のためカメラ屋さんの腕も発揮できず、一ノ保の出会いの吊橋で撮影し、徳沢の手前の新村橋までザンブー君が見送ってくれた。2泊3日の槍ヶ岳であったが、彼との旧交を温めネパールでの再会を約す。

8月27日の午後6:30からのMBSナウに『再会』と題して放映された。カメラマンは延べ2時間以上のテープを撮ったそう。それを約6分30秒くらいの番組にナレーションと音楽を入れて上手に編集されていた。

さすがにテレビの影響は驚くばかりで、20年以上逢っていない知人から電話がかかったりした。私達にとっては夏の良い思い出となりました。

新入生を勧誘する色々なクラブ・部のテントが、講堂に行く前の広場に立ちならぶ。中学生の時、ナギ山（岡山）に登っただけの私。好奇心で、山岳部テントをのぞく。兎山さんが居た。「お金なくても山に登れる？」と聞く。「パンツ一枚あれば登れる。」の答。「ホント？」と言うと、「水曜日に部会を開く。説明会やる。」と…。そして、のこのこ部室に行き、部に入る。1962年4月。当時、新人部員八人。卒業の時には半分の四人になった。

私は、岡山から全財産2万円を持って大学の入学式に参加。授業料 4,500円（前期）、他に色々とられ、残ったのは1万円余り。美章園駅の近くに、屋根裏部屋を借りる。相部屋。相方は金さんという医学生。五円玉を入れるとガスが出るコンロで、ホルモンを焼いての歓迎会。

金もなくなり、生活相談室の吉川のおっさんのところへ行き、アルバイトを紹介してもらう。実は「市大は、アルバイト紹介の体制が充実しており、すぐみつかる」と聞いて受験した次第。当分（といっても、数日間）の生活費をかせぐと、学校に行き、部室に行く。

我が市大山岳部は、ホント、お金が無くても「パンツ一枚」で、私は山に登れた。

初めての五月山行の時、靴さえなく、浜崎さんの大きな靴をかり、何枚も靴下（これも借りもの）を重ねたもの。靴ずれがひどかった。靴だけはなんとか自分のものをということで、九月に、奨学金が初めてまとまって入ったので、買った。

ピッケルは、とうとう、学生時代には買えず、卒業して初めての給料で、まっ先にピッケルを買った。この二つは今も大切にしている。

何も知らず、唯山に登れる、すぐにでも登れると思っていたのが、なんとトレーニングがある！！そして、そのきついこと、きついこと。マラソンと同じ、グラウンドを何周も何周も走り、さらにあの殺人的なウサキ飛びでグラウンドをまわる。もうバテバテ・クタクタ。下宿の急な狭い階段を登って3階の屋根裏部屋にたどりつくのに30分近くかかったのが忘れられない。

だけど、おかげで虚弱な体形からだだったのが、少し強い体形からだになった。二年生時には、50kg以上の荷をかついでボッカ。

当時、市大の学生運動は盛ん。山岳部のメンバーもよくデモに行った。デモ隊

の先頭に立ち、「ブタ箱」の世話になった部員も居た。私も一緒に居たのだが、私は助かり、彼らは逮捕され、申し訳ないなあと考えたもの。

アルバイトとデモ、そして山の大学生活。20年振りに、泉さんの葬式で会った丸子は「ホント大森、よう四年間、山岳部を続けたもんだ！」と。又、藤村は「大森は、山に休みに来ていたんだ。」と、「当時顔色は悪いし、体力もなくて…」とも。そして島川は「テントに入るなり靴をぬいで、ボリボリ水虫をかいているのにはビックリした。」と述懐。

皆さんに迷惑をかけ、助けられての山岳部四年間。ホントに感謝。

私は今、但馬（兵庫県北部地方）の標高 300mの廃村寸前の山村に住んでいる。子供六人、八人家族。五反の田畑で、お米・野菜・果物を作り、鶏・豚・ヤギ・ヒツジ・ハチなどを飼い、レンガと土でカマを築き天然酵母パンを焼き、冬場は、土と石で築いたカマで木炭を焼いたりしながら生活している。自分たちの生活に必要なものを自分たちでつくり、余った物を分けて、少々の現金を得ていく「自給自足」をめざす百姓。十年前「今の地球生命体の危機を糺しうるのは、百姓になることだと考え、百姓志願。もう四十才近くになっての決断。

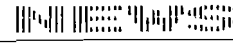
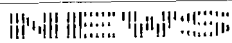
藤村、丸子、島川君ら一緒にやってきて、山に登り炭焼きに挑戦し、その炭で、さばいたトリ肉を焼いて食べた岡本先輩は、「山岳部に居たから、こんな百姓生活ができるのだ」と。小倉くん、西村くん、そして先日佐々木さんなど来訪。

「ここは、ネパールに居るのを感じさせるなあ。」の声。

農業国ネパールは、生存に欠かせない森林が急速に減り、土砂化が進行している。積極的な植林による森林再生の復活が求められている。私は、「地球環境のための国境を越えた民衆の協力」 — ネパールの緑化、ネパール青年との草の根交流を行っている『緑の地球ネットワーク』に参加している。

また、過疎化が進み、人手の入らなくなった山は荒れ、洪水によって豊かな表土が失われ、社会の衰弱をおこしている但馬の村に生まれたあの加藤文太郎を語る会にも参加し、彼の業績・足跡をたどりながら「ムラおこし」をやろうとしている。

これらは、ひとえに、岡本先輩の言われる「山岳部に居たおかげ。」感謝！！



★ 故泉隆次郎氏を偲ぶ会が下記のように催されます。皆様是非おいでいただきますよう、ご案内致します。案内状は改めて送付いたしますが、ご予約の程お願い致します。

日 時 : 平成4年12月6日(日)午後2時～4時

場 所 : 大阪国際交流センター2階 さくら西の間

TEL(06) 772-5931

また、泉氏追悼集の編集も大詰めに入ってまいりました。偲ぶ会の席上にて皆様にお配りする予定です。ご期待ください。

★ 昭和13年学部卒業の竹村邦雄氏が、去る5月31日お亡くなりになりました。奥様からのご通知を以下に紹介致します。慎んでご冥福をお祈りいたします。

「三年程前から次第に足、腰が弱り、杖をつくようになり外出には難渋していましたが、家の中では別に不自由なく暮らしていました。死亡の当日も平常と変わらず自宅の自分のベットに睡眠、その延長のようにあっけなく亡くなり、死亡診断書は呼吸不全とのことでした。私共は昨年金婚式を迎えましたが、五十年間山岳部のOBであることが誇りの一つであり最後まで自分の身辺は自分でキチンと処理できる山男振りでありました事をご報告申し上げます。」

★ 私事で恐縮ですが、5月に山岳会会員の尾形達也氏と結婚し、8月に新婚旅行と夏休みを兼ね、チングスハーンの国、モンゴルを旅してきました。英語も中国語も、知っている言葉は殆ど何も通じないこの国は、アジアではなく東欧なのだと思います。深刻なガソリン不足で国内の唯一の長距離交通機関である飛行機は飛ばず、乾燥寒冷な気候のせいか、手に入る野菜はキャベツ、キュウリ、じゃがいも、小麦、中国から輸入した高い米。パンも野菜も配給制です。毎日食べるのは羊の肉。郊外に行けば、遙かかなたまで続く草原と白く点在するゲル(中国語ではパオ)。草の海という表現どおりで、チベットの大平原の色が緑色に代わったようなものです。異常と思えるくらい親切な人々に接し、またやって来たいとの思いを強くしました。でも日本人ツアー客の多いこと！

<編集 矢倉記>